

機動戦姫MSガールズ ーサイドエピソードー

スターク・作家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時にに未来…突如として出現した謎の物体「コクーン」

様々な専門機関がこれを調査するが、その正体は未だにつかめず。誰が何のために作り上げたものか、依然不明のまま…。人類は幾度なく立ち向かうも圧倒的な力を持ちすべて『壊（つち）』へと変えられてしまった。

人類は歩んできた戦いの歴史と科学力を集結させ「MSガール」を開発。MSガールの活躍によって一度は撃退したかと思われた。だがやはり未知なる強大な力を完全に制することができず次第に、膠着状態へと陥るのであった。

そんな中、とある軍事基地で繰り広げられるMSガールズ達の日常を綴った物語であ

目次

プロローグ	1
ユニコーンの日	4

プロローグ

時に未来…突如として出現した謎の物体「コクーン」

様々な専門機関がこれを調査するが、その正体は未だにつかめず。誰が何のために造り上げたものか、依然不明のまま…。人類は幾度なく立ち向かうも圧倒的な力を持ちすべて『壊（つち）』へと変えられてしまった。

人類は歩んできた戦いの歴史と科学力を集結させ「MSガール」を開発。MSガールの活躍によって一度は撃退したかと思われた。だがやはり未知なる強大な力を完全に制することができず次第に、膠着状態へと陥るのであった。

アレックス「つとここまでが今現在の状況です指揮官さん。え？誰ですって？もうなに寝ぼけたことをいつているのですか？先ほど自己紹介しましたよ。私はガンダムNT-11アレックスですよ。もう忘れないでくださいね。」

アレックス「さて、先ほど説明したとおりコクーンという存在は様々な専門機関が調査してもその正体がわかっていません。誰に何の目的で作られたのか…そもそもそれは機械の類なのか話せば話すほど尽きることがありません。既存の戦闘兵器ではすべ

て「壊（つち）」となり無力されてしまいます。でも大丈夫です。そのために私達がいま
す。え？なんで私達は大丈夫かですか？それではですね私達は『Gシステム』と呼
ばれる顕現装置によつて作られております。こちらもまた原理は不明であります。過
去の歴史、特に戦闘や戦争で開発されたMSを解析し、こうして人間として顕現する
かなんとか：すみません説明にはなつていないかと思ひますが：おわかりいただけま
したか？」

不安そうな表情を露わにする

でもすぐに元気な表情へと変わる。

アレックス「でも大丈夫です！私達が戦つても壊になることはありませんし、今もこ
うして私達MSガールはどこかで戦つていますのでご安心ください。：あ、司令官そ
ろ書類の方を提出してもらいませんか：え？まだなんですか！もうあれほどいつた
はずですよ。提出していただく書類はすべて本部へと送らないといけませんので。」
ぶんすかと怒るアレックス。

アレックス「それとついででありますがなんですかこの請求書は：これ全部アプリ
ゲームの課金額じゃないですか！え？暇だからついやつちやつた？てへへじゃないで
すよ！資金面も考えてください。」

少し呆れた感じで指揮官をみるアレックス。

アレックス「でもまあ指揮官もちよつとした娯楽も必要ですよね。今回は大目にみてあげますよ。今度やっていたら私のガトリングが火を噴きますので注意してくださいね。」

ユニコーンの日

夜明け前のうす暗い外を歩く。

ひんやりと冷たい空気が肌に触れる。

私の名前はRX—0 ユニコーンガンダム。

こうして毎日、朝の散歩をするのが私の日課です。

この基地…とはいってもそんな要塞のようにぎちぎちしている場所ではありません。

もちろん大きな倉庫やドックや滑走路があります。

MS少女用に大きな寮が数多くあったり、食堂や購買といってお店もあります。

体育館もあったりと印象としては学園に近いです。

毎日散歩していてわかりますがのんびりとできる場所なのです。

でも…

ユニコーン「でも先輩たちはあの山の向こう側。その先で戦っている…。」

そう私たちはコクーンと呼ばれる存在と戦うために生み出された存在。

こんなにと穏やかに過ごしているのだろうか…罪悪感が時々、私に襲いかかります。

目の前にみずたまりがあり、ふと覗きこんだら私の表情はどこか悲しい。

ユニコーン「いけない。」

いつか私も先輩たちと戦いたい。

でも私にできることってなんでしょうか。

戦闘能力は確かに申し分ない程です。ですが戦闘経験ではまだまだ未熟な部分もあります。

こんな私でも役に立つこと…。

ユニコーン「これから見つけていけばいつか…うん、そうしよう！」

私は何かを考えてさっそく寮の方へ帰って行きました。

ー朝ー

アレックス「え？今日の一日だけ指揮官の副官になりたいですか？」

ユニコーン「はい。」

アレックス「どうしてなのですか？」

ユニコーン「そ、それは…。」

アレックス「それは？」

ユニコーン「私、皆の役に立ちたいのです！」

アレックス「役に立ちたい？」

ユニコーン「はいそうなのです！」

それから私はアレックスさんにありのままを話しました。

アレックス「そうなのですね。わかりました。では一日だけ副官を交代しますね。」

ユニコーン「！ありがとうございます!!」

アレックス「ただし副官の仕事は大変ですよ。私もできるだけ補助はしますがやるべきことはきつちりとおこなってもらいます。よろしいですか？」

ユニコーン「かまいません。よろしく願います！」

アレックス「わかりました。元気があつてとてもいいことです。指揮官が少しだらしないところはありますが……」

ユニコーン「だらしないところ？」

アレックス「いえいえこちらの話です。気にしないでください。」

こうして私、ユニコーンガンダム副官の1日が始まりました。

1日だけとはいえ油断はしません。

副官として仕事をこなしてみせます。不安は確かにありますががんばってみます！